

日中敬語表現と儒教文化

—日中両語教育への提言—

王 鉄 橋

Japanese And Chinese Honorific Expression And Confucianism

Some Suggestion for The Japanese And
Chinese Language Teaching

Wang Tie-qiao

Generally speaking, language and culture are closely related. The expressions in a certain are still more closely related to the specific culture in the area where the language is used. It is even a casual relation between them. For example, the honorific expressions shared by both Chinese and Japanese have a thousand and one links with Confucianism and the living culture which has originated from it.

The present treaties, starting from the human relationship based on the Confucian culture, has analysed the characteristics of the honorific expressions in the two languages, discussed their similarities and differences, and demonstrated the relations between honorific expressions and the Confucian culture. On the basis of the evolution of the history and human values, the treaties has also examined the development and change of the honorific expressions in the two language and from the theoretical and practical point of view put forward some suggestions for the Japanese and Chinese language teaching.

ある。中でも「孝」(filial)ということばは中国人の心にやきつけられたものようだが、アメリカやオーストラリアの若者に「めずらしいことば」と言われたことがある。日本は儒教文化圏を構成する一員であるし、日本語のものは中国語のそれを漢字とともに受け入れたので意味的にかなり一致しているが、それでも日本の社会と結びついて実用的に理解し、日本独自の文化と融合したので概念のずれや各徳目の比重の違いがある。たとえば、中国の「忠」は皇帝や国家に対するものだが、日本の場合、天皇・国家・組織・主人・親分に対する広い概念となっている。また中国では「忠」より「孝」が重んじられるが、日本では「孝」より「忠」が重んじられるように思われる。

日本と中国は、歴史から見れば同じ東アジア文化圏に所属し、農耕文化によるつながりが縄文時代からある。とくに農耕文化に根ざしている儒教思想が中国の漢時代より日本に伝わってきて貴族連合国家と氏族社会の価値体系となった。そういった価値体系に特色づけられた「冠位十二階」や後世の「士農工商」などの身分階層制度が強く人間関係とそれを結びつける言語行動に影響を与えつづけてきたのである。日中両国の敬語はそういった社会構造と人間関係の中で育ってきたのである。

儒教文化はヨーロッパのキリスト教文化そのものと神との関係に精神的平衡を求めるとちがって共同体内外の人間関係に精神的平衡を求めめるのである。それは、敬語が欧米ではなく、中国・朝鮮・日本で発達してきた原因の一つであると思う。常に人と協力し、人との関係に気を使ったり工夫をしたりしなければならぬ文化は、必ず人間関係を結びつけるのに必要な言語形態を生み出すのである。それは敬語と敬語表現である。もちろん、どこの国でも敬語表現が存在しているが、中でも東アジア諸国の敬語表現の発達と存続に、儒教文化が温床のような役割を果たしてきたことが考えられるのであろう。

そうした共通の儒教文化が中国語と日本語の敬語表現の生成と発展に役立ち、またその相違点によって日中両語の敬語表現がそれぞれ異った様態を呈したのである。

このように考えると、言葉を十分に理解するには、その源泉となる生活環境・様式および人間関係と、人間と物の関係における価値体系もある程度理解する必要があるように思われる。それは社会言語学の課題であるばかりでなく、日本語教育と中国語教育においても重要なポイントではないかと思われる。本稿では、主として日中両国の敬語表現と両国に共有している儒教文化の変容について考えてみたいと思う。その上で日本語教育と中国語教育についていくつか提言してみたい。

2. 日中両語の敬語表現と儒教文化

(1) 日中両語の敬語表現

日中両語の敬語表現を捉え、そして文化との関連を考えるには、敬語表現の機能種類（尊敬・謙譲・丁寧など）と形態構造（人称・選語・接辞・構文）⁽²⁾の両面から歴史的に考察する必要があると思う。まず日本語の敬語表現について考えてみよう。

宮地裕氏の考察⁽³⁾によれば、日本語の敬語の機能種類の分化と発展は次表のようにまとめられているが、しかし、古代文献資料の数および敬語の使用範囲と量に限られてその変化はつかみにくいところがあるし、各種類の量的変化が観察しにくい弱点もある。たとえば、上代の資料が『大宝律令』『古事記』『風土記』『日本書記』『懷風藻』などに限られ、記述者と記述内容がどれだけ当時の言語実態を反映しているか研究する余地はかなり

表 I

	美化語	丁寧語	丁寧語	謙譲語	尊敬語
上代	×	×	×	○	○
中古	×	△	○	○	○
中世	△	○	○	○	○
近世	○	○	○	○	○
現代	○	○	○	○	○

残っている。一方、上古時代は中国から伝来した儒教文化が主として皇帝や上流社会に入り、そうした背景に生れた文献は貴族と上流社会の生活様態を反映したものであり、それは社会全体の人間関係を反映する敬語表現であるかどうかとも課題をのこしている。また、近世後期、江戸敬語の発展と欧米語の影響もあって構造的にどのような変化がおこったか定かではない。いずれにせよ、敬語表現が出揃ったのは近世である。近世はまた日本の儒教文化の全盛期である。近世前期の上方敬語が上流社会から町人・遊女など庶民社会へ普及されていくとともに、儒教文化も江戸時代において支配層から武士道を通して町人文化と結びつき、社会全体に広められていったことに注意すべきである。つぎに日本語敬語の成熟期である近世の敬語表現を考えてみよう。

近世における敬語をまとめれば次表⁽⁴⁾のように示すことができよう。

表II

人 称 的 敬 語 表 現	尊 称	貴下・貴殿・御辺・尊下・貴方・ <u>貴公</u> ・貴君・貴兄・貴様・ <u>御自分</u> ・ <u>貴所</u> ・ <u>足下</u> ・ <u>尊兄</u> ・ <u>尊君</u> ・ <u>尊公</u>
	謙 称	小生・僕・余・ <u>拙者</u> ・ <u>下拙</u> ・朕・わたくし・てまえ
	他 称	<u>あのさん</u> ・ <u>かのさま</u> ・あなた・ <u>さま</u>
選 語 的 敬 語 表 現	敬 語	<u>おぼす</u> ・ <u>おぼしめす</u> ・ <u>ごらうじる</u> ・ <u>ごらんなさる</u> ・ <u>おほせられる</u> ・ <u>おっしゃる</u> ・ <u>およる(寝)</u> ・ <u>げしなる</u> ・ <u>おやすみ</u> ・ <u>おひなる(起きる)</u> ・ <u>きこしめす(食)</u> ・ <u>めしあがる</u> ・ <u>あがる</u> ・ <u>めす(着・乗)</u> ・ <u>おこし(行・来・有)</u> ・ <u>おはこび</u> ・ <u>おひろひ</u> ・ <u>みえる(来)</u> ・ <u>わせる(有・行・来)</u> ・ <u>ござる</u> ・ <u>おじゃる</u> ・ <u>おりやる</u> ・ <u>おりない</u> ・ <u>おいでなさる</u> ・ <u>いらっしゃる</u> ・ <u>ござんす</u> ・ <u>おいでる</u> ・ <u>たまふ</u> ・ <u>たまはる</u> ・ <u>たもる</u> ・ <u>くださる</u> ・ <u>くださんす</u> ・ <u>くだんす</u> ・ <u>あそばす</u> ・ <u>なさる</u> ・ <u>めさる</u> ・ <u>さっしゃる</u>
	謙 語	存ず・存ずる・拝見する・うけたまはる・うかがふ(聞)・もうしあぐる・いただく(食)・くださる・まるる・ <u>参ずる</u> ・あがる・うかがふ(行)・ <u>はべり</u> ・ <u>さうらふ</u> ・おめにかかる・かしこまる・たてまつる(与)・

選 語 的 敬 語 表 現	謙 語	まゐらす・おます(与)・進ずる・進ぜる・あげる・さしあげる・ たまはる(もらう)・いただく・くださる・頂戴する・おめにかける・ 御覧に入れる・おみみに入れる・つかまつる・いたす
	丁 寧 語	存ずる(思)・まうす・いただく(食)・たべる・まゐる(行・来)・つ かまつる・いたす・さうらふ・ござる・ござります・ございます・ ござんす
構 文 的 敬 語 表 現	敬 語	でいらっしゃる・ていらっしゃる・たまふ・(て)たぶ・てたまはる・ てたもる・てくださる・御〜くださる・てくださんす・てくだんす・ 御〜あそばす・めさる・御〜めさる・さっしゃる・さします・なさ る・御〜なさる・(さ)せたまふ・(御)〜あり・(御)〜ある・(御)〜 なし・(御)〜ない・(御)〜やる・御〜になる
	謙 語	まうす・御〜まうす・御〜まうしあげる・たてまつる・まゐらす・ ておます・て進ぜる・てあげる・てさしあげる・御〜いたす・てい ただく・てをる
	丁 寧 語	(に)さうらふ・(で)ござります・(で)ございます・(で)ござんす
	敬 語	らる・らるる・れる・られる・(さ)せらる・(さ)せられる・(さ)しゃ る・(さ)しゃるる・(さ)しゃんす・(さ)んす・やしゃる・やしゃん す・やさんす・やんす・なます・なんす
	謙 語	御〜ぢゃ・御〜だ・御〜でござります・御〜でございます
	丁 寧 語	です・まらする・ます(る)・やんす・やす
接 辞 的 敬 語 表 現	敬 語	御+名詞+形容詞(御心苦し)・御+形容詞(御恋し)・御+準名詞(御 幼稚)・御+副詞(御ちと)
	謙 語	お・おみ・おん・み・貴・ぎよ(御)・玉・ご(御)・尊・高・芳
	敬 謙 語	愚・小・寸・拙・微・弊 うえ・がた・ <u>ぎみ</u> ・ <u>さま</u> ・ <u>さん</u> ・ <u>たち</u> ・ <u>どの</u> ・ <u>君</u> ・ <u>兄</u> ・ <u>御</u> ・ <u>ごせん</u> ・ <u>ごぜ</u> (御前)・ <u>子</u> ・ <u>氏</u> ・ <u>ども</u> ・ <u>め</u> ・ <u>ら</u>

表注：点線がついたものは現代敬語ですたれた語である。

前表は近世前期の上方敬語と近世後期の江戸敬語を合わせてまとめたものである。近世前期の上方敬語は封建社会の様相を反映し、武士・町人・遊女などの身分と男女の違いによって表現形式がさまざまに分かれてきわめて特色のあるものとなり、現代日本語の敬語の原型となったのである。

その後、政治文化の中心が大阪・京都から江戸に移る歴史背景があつて上方敬語が江戸語と結びついて相互補完という一層の発達と普及を見せていた。つまり、上方語には尊敬語を豊富にする傾向が見られるのに対して江戸語は謙讓語を豊かにする傾向があつた。⁽⁵⁾

このように、幕末になつて上方敬語に江戸敬語が加わつて江戸敬語の表現機能を生かして助動詞や補助動詞などの構文的な敬語表現が発達してきたのである。例えば、上方敬語の代表的な「れる」「られる」「ある」「やる」「やす」などに加え、江戸敬語の接頭語「御(お・ご)」などと補助動詞の「お~になる」「お~やる」「お~いたす」などが発達して、普及ししやすい形態となつてきた。そして敬語を使用する階層と範囲が大幅に拡大され、儒教文化による社会の多重階層と身分制に拍車がかかけられ、日本語の敬語はその成熟期を迎えるようになったのである。

明治からの近代日本語の敬語は、天皇制による集権化、身分制度の廃止、経済交通の発達、教育の国家的統制によつてかなりの変化が起こつた。方言的な敬語の一部と遊里語にもとづいた敬語表現及び一部の人称的敬語表現がすたれる傾向を見せたが、一方では、構文的敬語の増加があり、また語によつて使用率の増大もあるので総量的にはたいした変化がなかつた。もちろん文体は言文一致運動によつて転換はされたが、敬語表現はもともと庶民文化に根をおろしていたし、一方、天皇制の確立、新しく華族・士族・平民などの区別によつて敬語の使用は一層厳然となり、また教育の発展にともなつて敬語が一層普及される下地があつた。

ところが、昭和二十年の敗戦後の社会民主化の影響によつて天皇に対す

る敬語の簡略化・勅語や天皇の言葉の普通化などの現象と、伝統的な農業社会がすたれ、家族の核家族化がすすむことによって敬語の簡素化の現象が見られるようになったのは事実だが、それと同時に近代産業・商業の発達と都市化の発展にもなって社内敬語の訓練と商業敬語の多用によって敬語の使用量の減少が見られない。とくに商業敬語における複雑な構文的敬語表現（休業させていただきます・毎度ご来店いただきましてまことにありがとうございます。お先に失礼させていただきます、など）がむしろ発達する傾向も見せている。⁽⁶⁾

以上、見てきたように日本語の敬語表現は近世に入ってその機能種類が出揃って、明治から現代敬語となって各種類の敬語表現は量的にたいした変化を見せず、構造的には一部選語的敬語表現や人称的敬語表現の減少と、構文的敬語表現の増加が見られたのである。

つぎに、中国語の敬語表現を考えてみよう。中国語の敬語は封建官僚体制下の文語体の古代敬語と清末・辛亥革命・五四運動以後に文語体敬語と白話文敬語の並存期と社会主義革命後の現代中国語の敬語とに分けられる。中国語の古代敬語は人称的敬語表現と接辞的敬語表現および選語的敬語表現に表われている。全体として人称的敬語が圧倒的に多い。それが中国の儒教思想の「名分」「上下」「長幼」とかかわっている。しかし、皇室を含む文人官僚制による国家体制の中で使われている文語体敬語が一般庶民にあまり普及されなかったことは日本と異ったところである。中国現存の歴史文献は殆んど文語体のものである。その概略を眺めてみると、つぎのようなものがあげられるであろう。

人称的敬語としては、対称の場合に①地位・爵位・身分によるもの、たとえば、「万岁」「千岁」「大夫」「公子」「君」「卿」「公」「大人」などがある。②美德・教養によるもの、たとえば、「子」「先生」「叟」などがある。③相手の地を尊称とするもの、たとえば「陛下」「足下」「閣下」などがある。

自称する場合に①自分の名を称する。たとえば、孔子は「丘也幸，苟有過，人必知之」（論語述而）と言っている。②自分の品性を低めるもの、たとえば、「不徳」「寡人」（寡徳のもの）「不穀」（不善）などがある。③自分の地位を低めるもの、例えば、「下」「賤」「貧」による「下走」「賤子」「貧道」「小人」などがある。他称の場合に、人の字を使う。例えば、「子夏」「子貢」「子卿」などがある。

選語的敬語表現はきまり文句と化した賛辞・祝辞に多く見られる。たとえば、「皇恩浩蕩」「威望風施」「莫名頌禱」「仰慕德風」「高瞻遠矚」「遙瞻光霽」「松齡鶴算」など、数えきれないほど例がある。

接辞的敬語表現には上述の「賤」「貧」「小」を含め、表Ⅱに見る例が多く見られる。

しかし、古代敬語が庶民層に広められたものはまれである。近世の白話文の文学作品（石頭記・西遊記・水滸伝など）を捜しても、「父親大人」「母親大人」「官人」「兄長」「客官」「妾」「奴」「小人」「小女」などに限られるようである。

しかし、この一般庶民の白話文における敬語表現は主として家族・宗族・村落集団での親族名称の面で発達してきたもので、現代中国語の敬語表現を特徴づけているのである。例えば、「父親大人」「母親大人」「伯父大人」「嬢嬢」「舅父」「姑母」「姨母」「姨夫」「叔父」「二嫂」「張大姐」「李大哥」というようなものが、家族・宗族と近所づきあいなどの人間関係に一番多く使われている。

また、古代敬語の脈絡を引いた文語調の敬語表現が、戦前の上流社会、文人・商人社会の敬語として存在していた。例えば、「令尊」「令堂」「令姐」「令兄」「令妹」「尊夫人」「令岳父・母」「家父」「家母」「舍弟」「賤内」「愚妻」などと、「拜」「奉」「謹」「敬」「惠」「賜」「台」「敢」などをかぶせた動詞などがあつた（表Ⅲ参照）が、新中国が成立してから台湾と一部の年

配の知識人の書簡のほかは、殆んど使われなくなった。

表Ⅲ

尊 敬 語	貴—貴国・貴校・貴姓・貴方・貴庚
	高—高兄・高寿・高徒
	大—大作・大名・大駕
	令—令尊・令堂・令郎・令爵・令兄・令妹
	賢—賢弟・賢妻・賢侄・賢婿
	尊—尊姓・尊府・尊駕・尊夫人・尊師
	宝—宝地・宝眷
	雅—雅教・雅意・雅兴
	台—台甫・台鑿・台兄
	賞—賞光・賞収
謙 讓 語	光—光临・光顾
	惠—惠贈・惠顾・惠临
	贱—贱姓・贱恙・贱内・贱荆
	敝—敝姓・敝处
	鄙—鄙人・鄙意・鄙见
	舍—舍弟・舍妹・舍侄
	家—家父・家叔・家母
	愚—愚见・愚兄・愚妻
	拙—拙见・拙作・拙著・拙笔
	小—小弟・小人・小女
丁寧語	拜—拜托・拜会・拜访・拜见・拜别・拜读・拜请
	奉—奉陪・奉劝・奉告・奉还・奉送

現代中国語の敬語表現として北方の白話文を基礎にしてできた普通話に生きつつけているのは人称・親族名称や一部の接辞的表現および近代から欧米言語の影響で新しく出現した「您」「她」など人称的表現と顕著に増え

てきた構文的敬語表現、例えば「能不能请您～」 「是不是可以让我～」などである。

要するに、中国語の敬語は古代敬語では敬謙度の高い皇室・官僚層の敬語表現が多いが、現代中国語の敬語では親族名称などの敬語表現が多い。古代敬語には敬語と謙語が併存したのに対し、現代敬語には尊敬語があるが、謙讓語が少ない。歴史的に見れば、中国語の敬語は日本語の敬語より変化が激しいようである。

(2) 日中両国の儒教文化

中国と日本は同じく儒教文化圏に属しているので、いうまでもなく政治・経済・文化(言語を含む)の面で共通するところがある。たとえば、歴史上の身分制・階級制および家族の人間関係(共同体意識など)がその例である。それらを反映する敬語表現にも人称的敬語や接辞的敬語の相似性を持っている。一方、歴史・文化の構造と発展は様態がかなり違うので価値観の相違も当然なことである。そういった相違はいうまでもなく敬語のありかたに影響を及ぼすわけである。

a. 国家倫理と家族倫理

中国では家族を単位とする小農民の生産様式によって家父長を中心とする家族ないし宗族体制が秦前から整っているし、また異民族の侵入や王朝交代による不安状態がくりかえされた中で血縁関係の家族が一番たよりになるものと価値づけられ、「孝」「悌」「慈」「愛」による家族倫理が発達してきた。一方、王朝の建立と維持をするために、支配層によって皇帝を中心とする国家の統一と安定が強調され、儒教の「忠」による国家倫理も発達してきた。中国では歴史を通じてそういった家族倫理の秩序と国家倫理の秩序が並行して存続してきたのである。家族の中では家父長を中心にし

て家族成員が長幼・男女・尊卑による上下の関係が親族名称どおりに和かで自然に保たれている。国家（皇帝と臣・臣と臣の間）では、皇帝が絶対的な権威を持って官僚たちに一方的に忠誠をつくすのを求め、倫理的規範も厳しく要求し、位階体制による上下秩序が厳然としていた。しかし、官僚層が朝代の交替によって非常に不安定なことから、在職のうちに家族や宗族のために蓄財したり職権乱用したりして国家と農民は常に対立する状態であった。官僚たちは農民と農民の組織を教養のない「暴民」「乱党」と見るが、農民たちは官僚たちを口だけうまい「偽善君子」と呼んでいた。官僚階層は言語行動をかなり慎しみ、文献的な教養を表わす文語的敬謙語をうまく運用していたが、農民たちにはそんな「教養」がないから家族と組織では世代年令によって親族名称をつけ、宗族的秩序を保っていたのである。だから官僚体制の中の型どおりの敬語表現が公の場や官用文書には使われても官僚自身の家族には入りにくいし、まして庶民の家族には普及されるはずはなかったのである。

そういった文化背景においては、中国語の敬語表現の特徴は次の三点が捉えられるであろう。①文人や文人官僚に記された文献・書簡や、使用された文語的言葉（官話）に敬語が多く見られるが、一般庶民・農民の話言葉には親族名称以外、あまり使われないこと、②中国の家族と宗族体制が発達してきた結果、中国語の敬語表現に親族名称が細かく区分されて広く活用されていること、③家族（親族）については相対敬語が行われるが、会社や組織内ではあまり行われないことである。

日本では純粋たる家族倫理もないし、厳然たる国家倫理もない。血縁関係による家族を拡大して必ずしも血縁関係でない利益と権力を結合した家族的集団の倫理であった。このような集団と集団に所属する人びとがその中で世襲的な身分を持ち、それぞれその身分にあう言葉づかい、つまり尊貴・謙卑の身分にあう尊敬語と謙卑語を選ばなければならない。そういっ

た倫理・価値観が鎌倉時代から室町時代を通じて江戸時代前期になって言葉に反映して上流社会の敬語から武家社会を通して町人社会の敬語へと普及し、また「タテ」と「ヨコ」の人間関係によって社会の各階層までいきわたっていったのである。⁽⁷⁾ 一方、日本人の自然と物に対する崇拜心理に加えて日本語の敬語は繊細な姿とともに、多様な機能へと発達してきたのである。

また、日本（とくに徳川時代の日本）の支配階層は文人によるものではなく、武士や武士出身の将軍・大名となっていたので中国の文献的教養しかない官僚とちがって武士の倫理は儒教的ながらかなり実務的なもので、実務的なものが労働階級の町人・農民層に入りやすい傾向があった。また、江戸時代の町人階層の財力的発展によって武士や大名と町人層との関係が密接化することも敬語表現の低層化に機能していたと考えられる。

以上のような文化的背景によって次のような日本語の敬語表現が特徴づけられたのであろう。すなわち、①中国のような厳然たる家族・宗族体制ではないので親族名称を区分して使われているが中国ほど細分化されていない。②拡大家族の普遍化によって家族内だけでなく社会全体の敬語表現を相対化している。③支配階層や文語的敬語に限らず、社会各階層にも話しことばにも敬語表現が遍在している。

b. 中国の「倒皇」と日本の「尊皇」

日中両国の近代化にともなって人間関係の構造が変り、その変化は言語に反映されている。日中両国の近代史が辿った異った道は、社会の転換に影響を与えたばかりでなく、それぞれの敬語表現を特色づけていることも考えられよう。

中国は、近代において資本主義文化が強制的に輸入され、辛亥革命が起った。政治上、皇帝を中心とする封建官僚体制の不平等な階級・身分制度が打破られ、意識上、自由・平等・博愛が提唱されていった。さらに中国の

伝統文化を徹底的に否定しようとするマルクス主義者左派の思潮もあったので、あまり深く庶民に浸み込んでいない皇室・官僚層の文語的敬語表現がたちまち消えていったのである。中国人の意識転換が今世紀初期から始まっていたのである。毛沢東の労農革命においても、「官兵一致」（官兵平等）「幹群一致」（幹部と大衆の平等）を提唱していた。社会主義中国が成立して全然高低・貴賤の別のない「同志」という人称的丁寧語が広く普及された。しかし、「文革」によって毛沢東の個人崇拜が煽られ、社会の人間関係が乱されてしまい、また、社会全体の物不足と相俟ってだんだん政治力による権力や、物質を管理する権力が価値づけられたので、人びとの間では言葉の敬謙を慎しむことが要求されてきたのである。例えば、「文革」前は「请帮我解决一套房子。」（家の問題を解決してください。）というようなことばで通せることであったが、「文革」後の現在になると、「李科长、是不是能请您帮我在会上提一下房子的事？」（李課長に会議の時、私の家の件をちょっとふれていただけますでしょうか）といわなければ、相手は目もくれないであろう。

それに対して日本は幕末の時、国学を提唱し、中国の儒学の「忠」と合致して政治上「尊皇攘夷」の運動を引き起していた一方、軍事や経済上は西欧から輸入して高度集権的な国家的資本主義ないし軍国主義に発展していったので人間関係は自由・平等・博愛よりむしろ上下服従の関係になり、士農工商の身分制度のかわりに、華族・士族・平民などの新しい身分制度が立てられ、儒教倫理は武士道に変容して軍隊や会社に移り、国家や上司への敬畏と献身精神が強調された。それが言葉に反映してもともと広く存在していた敬語表現が一層生かされ、敬語表現の衰退を見せなかった。戦後になって天皇権力の低下、民主化の推進などがあってはじめて敬語簡素化の現象を見た。日本人の意識転換が戦後から始まったのであるが徹底したものではないようである。

それをみると、敬語表現の発展は社会構造と人間関係およびそれらにかかわる価値観の転換と決して無関係ではないことが理解されよう。

3. 日本語と中国語教育への提言

ある言語は、ある地域の生態環境と歴史・文化の発展および特定の人間関係・社会意識とともに因襲的に、また言語自身の発展規則にしたがって形成し発展してきたものである。そうした中での敬語表現は時代の社会構造と思想・文化の流れと密接なかかわりを持ち、それに大きく左右されるものである。換言すれば社会存在（階級・身分制度・長幼親疎）・社会意識（階級意識・価値観など）といったものによって人間関係に対する認識とその認識による人間の言語行動ないし敬語表現が大きく相違するということが、以上の考察で、ある程度分ってくるであろう。

したがって、日本語と中国語の研究においてはもちろんのこと、外国人に対する日本語教育と外国人に対する中国語教育においても言語とその社会との関連を考えなければならない。とくに人間関係を反映する敬語表現（広くとれば、待遇表現）は日本語の教育上重要な項目の一つであるし、外国人にとっても難点の一つでもある。日本語の敬語表現が人物と場面に応じて適当に使えるようにするには、日本語の敬語の背後に潜んでいる価値観・国民性を知っておく必要がある。例えば、勧誘・応答における「直接表現型」と「調和重視型」の報告がある。⁽⁸⁾ このような日本の拡大家族（家族的集団）の人間関係における「和」意識の価値観と、中国の家族内の「甘え」や国家との対立の背景が分れば、学生も日本語のこの特徴に気をつけながら意識的に勉強していくであろう。日本語の相対敬語と中国語の相対性は、日本と中国の「内親外疎」の価値観と両国の歴史的な流れにおいて人間関係を知っておかなければ理解しにくいであろう。中国の親族名称が複雑であって単純に覚えることは難しいが、中国の親族系譜と宗族制度を

知っておけば理解しやすくなるであろう。また指導者の立場からその言語表現の背景と原因を知っていれば意識的に指導していけるのであり、その言語表現の原因・由来を付け加えて説明すれば、学生にも分かりやすく、深く印象づけることができるであろう。

言語と文化の関連、とくに日中敬語と儒教文化の関連は社会言語学の重要な課題の一つである。また比較言語学と比較文化論に期待することも多い。日本語と中国語の教育において文化に即して言語を学び、文化と関連して言語を教えることによって、両国語教育のレベルを新しい段階に導くことができるであろう。日本語の学習と教育、外国語教育としての中国語教育を経験してきた筆者は、今後の日中両語の教育のためささやかな問題提起として以上の提言をさせていただいたものである。

最後に本稿の作成にあたって全文を目を通した上、ご訂正いただいた本学言語文化研究所研究員田中寛先生と、原稿の校正にお手伝いいただいた本学言語文化研究所の今井陽子様にご礼を申し上げます。

注

- (1) 陳原『社会言語学』の第三章の第三節による。
- (2) 王鉄橋「現代中国語の敬語表現」『言語と文化』（文教大学言語文化研究所 1989年第2号P25）による。
- (3) 宮地裕「敬語をどうとらえるか」『日本語学』（明治書院 1983年第1号）P9による。
- (4) この表は辻村敏樹『敬語の史的的研究』（東京堂出版 1976年）の附表にもとづいて整理したものである。
- (5) 田中章夫「近世敬語の概観」『近世の敬語』（林四郎・南不二男編・明治書院 1973年11月）に所収P20による。

- (6)宮地 裕「敬語をどう捉えるか」前掲論文による。
- (7)全 日坤『儒教文化圏の秩序と経済』(名古屋大学経済学部附属経済構造分析資料センター) 1983年 P101による。
- (8)劉 建華「勧誘・応答における中日言語行動の比較」による。

参考文献

- (1)林 四郎・南不二男編『敬語講座④・近世の敬語』明治書院 1973年11月
- (2)——『敬語講座⑤・明治大正時代の敬語』明治書院 1984年5月
- (3)陳 原『社会言語学』学林出版社 1983年8月
- (4)鈴木孝夫『私の言語学』大修館書店 1987年7号
- (5)長谷川如是閑『言葉の文化』中央公論社 1943年
- (6)荒木博之『やまとことばの人類学』朝日選書 朝日新聞社 1986年2月
- (7)西尾 実『言葉と生活』毎日新聞社 1955年11月
- (8)洪 樵容『尺牘探求』二松学舎大学出版部 1984年5月
- (9)王 力『漢語史稿』(上・中・下)中華書局 1980年新1版
- (10)宮地 裕「敬語をどうとらえるか」『日本語学』明治書院1983年1月号
- (11)津田左右吉『儒教の実践道徳』岩波書店 1938年6月
- (12)王 鉄橋「現代中国語の敬語表現」『言語と文化』文教大学言語文化研究所 1989年第2号
- (13)臼井吉見編『現代教養全集10 いきた言葉いきた文章』筑摩書房 1959年6月
- (14)北原保雄編『敬語』(論集日本語研究9)有精堂 1984年8月
- (15)劉 建華「勧誘・応答における中日言語行動の比較——『直接表現型』と『調和重視型』をめぐって——『待兼山論叢, 日本学篇第18号』大阪大学文学部 1985年1月